

和紙を漉く

ほんみのし
(本美濃紙)

これが
コウゾの皮(白皮)だよ



→皮を広げたところ。

てす わししょくにん
手漉き和紙職人

さわむら ただし
澤村 正さん

ほんみのし ほんかい ほんみのし
本美濃紙保存会会長。伝統的な
用具、製法を用いて、本美濃紙
を、15歳から現在まで、71
年漉き続けています。

美濃(今の岐阜県美濃市)では、「本美濃紙」とよばれる和紙が、1300年以上前からつくり続けられています。本美濃紙は、コウゾを原料として、伝統的な用具を使い、昔から伝わる流し漉きでつくられていて、石州半紙、細川紙とともに、ユネスコの無形文化遺産に登録されています。

この本美濃紙を、71年漉き続けている澤村さんに、仕事場でどのように和紙を漉いているのかを見せていただきました。



これから漉く和紙に、不純物が入らないように、澤村さんは、白皮を手ですくい上げては、くまなく見てちりとりをしました。

ちりとり

澤村さんが原料として使っているコウゾは、茨城県で栽培されている「那須楮」です。白皮を煮たあと、流水にさらし、あく抜きをして、ちりとりをします。ちりとりは、流れるきれいな水に白皮をひたしながら、自分の目をたよりに、不純物やきずをていねいに取のぞく、根気のいる重要な作業です。



叩解(原料を、たたいてほぐす)

ちりとりを終えると、澤村さんは白皮を平らな石の台にのせ、両手に木づちを持って、強く何度もたたきました。白皮の繊維を解きほぐすためです。10ページ(9)のように、棒で打つところもありますが、美濃では、昔から、独特の模様がきざみこまれた叩解専用の木づちを使ってきました。

明治時代の本に、同じ木づちを発見!

木づち

も入っています。
たたく面には、菊の花状に、切れこみがいく筋状



↑「美濃紙抄製図説」(明治13年発行)。石の台にのせた白皮を、同じ形をした木づちでたたいています。

↑左右の木づちを、交互にリズムカルに打ち下ろす澤村さん。白皮に、木づちの模様がたくさんつきました。

原料を漉き舟(紙を漉く水槽)に入れて調合

叩解を終えたら、白皮を「漉き舟」という紙を漉く水槽に入れ、竹の棒や「馬鍬」という用具を使ってよくかき混ぜ、コウゾの繊維を分散させます。このとき、「ネリ」(美濃では「ねべし」)も入れて、一定の濃度に調合します。

ネリ(トロロアオイの液体)を加える



→ネリを投入するところ。ネリは、トロロアオイの根から抽出した粘液です。分散させたコウゾ繊維の浮遊状態を保ち、沈殿をおさえ、漉いて重ねた紙の張りつきをおさえ、はがしやすくなります。



↑トロロアオイ